ワークショップ方式による農業用水路改修計画の策定プロセス
－岐阜県丹生川村若林用水路を事例として－

Participatory Planning Process of Rehabilitation Works
－ A Case Study of WAKABAYASHI Irrigation Canal,Gifu Pref.－

○日比野　美香　　松本　康夫
Mika HIBINO　and　Yasuo MATSUMOTO

Ⅰ．はじめに

近年，農業農村整備事業の推進にあたり，計画の策定段階から維持管理活動等に至る様々な場面において住民参加が求められている。また，住民参加活動を計画策定プロセスに取り込み，計画策定手法として活用することが課題である [1)]。本研究では，岐阜県丹生川村若林用水路を対象として，ワークショップ方式(以下，「ＷＳ」)による改修計画の策定プロセスについて検討した。

Ⅱ．対象地区と事業概要

若林用水路(総延長 4,642m)は，村の中央部に開けた水田 89.9ha を潤す。約 400 年前に開削されたと言われ，Fig.1 に示したように用水路に沿って，平湯街道(高山陣屋を起点に，安房峠を経して松本に至る約 100km の街道)があった。街道の荷役を担う伝馬を洗う馬洗場や道祖神祠等，数多くの史跡がある。また，農村生活に密着した水路であり，落差工(地元で「どんど」)を利用して搗屋，挽屋が点在していた。水路の老朽化に伴い，集落を流れる区間(645m)をふるさと水と土ふれあい事業で改修することとなった。改修区間は，伝統的な玉石積みによる水路が残存する区間でもあり，用水路のもつ多面的・公益的機能を発揮させ，地域連帯感の新たな熟成等を図る観点から改修計画策定にあたって，ワークショップ方式を提案した。

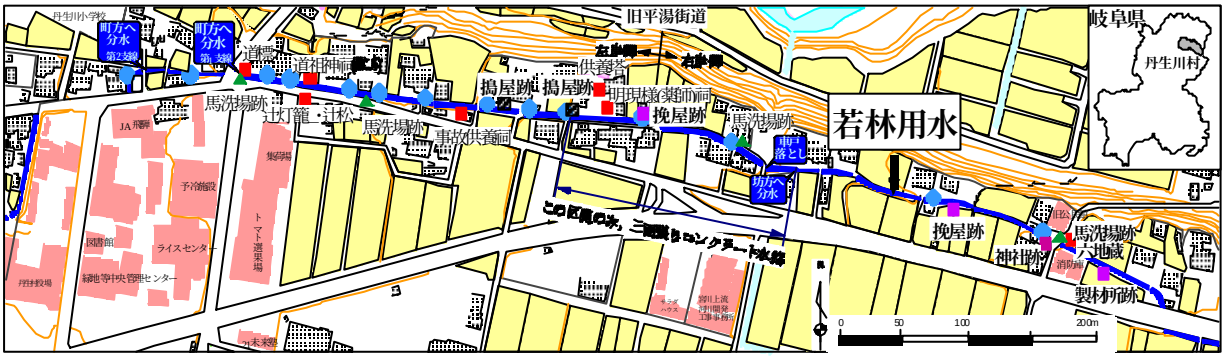

Fig.1　The outline of rehabilitation area

Ⅲ．ＷＳの運営と構成

ＷＳの運営と方針の検討，ＷＳの成果のニュース発行，ＷＳで出された意見を集約し，整備計画に反映させる役割として，水路管理協議会，区長，行政(県・村)，コンサルタント，大学から構成される若林用水路検討会を設けた。ＷＳの参加対象者は改修区間沿線の約 30 戸を中心とし，異なった世代，性別の意見を反映させるために同世帯から複数参加するよう呼びかけた。ＷＳは全体活動とグループ活動で構成される。グループ活動については世代別で６グループに分かれ，各グループに２～３名のファシリテーター(行政，コンサルタント，学生)がついた。また，ＷＳの名称は落差工に関わる方言を用い「どんどん会議」と命名し，参加者に親しまれやすいよう工夫した。各ＷＳ終了後，参加者とファシリテーター(グループ活動時)を対象に，ＷＳに出席した感想を聞いた。ＷＳプログラム及び感想は Table1 に示したとおりである。

岐阜大学農学研究科　*Graduate SchoolofAgriculture,GIFUUniversity*

ワークショップ，住民参加，計画策定，地域用水

Table1 Programs and opinions of workshops ○:全体活動 ●:グループ活動 ▲:アンケート調査 ・:参加者 *:ファシリテーター

	WSプログラム	参加者・ファシリテーターの感想(抜粋)
第1回 (2002.10.7)	○事業概要・WSの進め方と概念の説明 ○用水の景観特性についてスライド上映 ○歴史探検マップの説明 ●現状把握 ●整備内容のアイデア抽出 ○グループ会議内容の発表	・今まで知らなかったことが分かり，親しみがわいた① ・水車を復元しても利用しなければ長続きしない ・公共事業に参加し作り上げていく意識が出てきた② *ファシリテーターとしてもう少し勉強が必要 *世代別に特徴のある意見が多く出て良かった③ *参加者の用水に対する関心の高さを確認できた
第2回 (2002.11.27)	○用水整備事例についてのスライド ●整備で一番大切にしたいこと ●今後の利活用意向 ●整備項目の配置図づくり ○グループ会議内容の発表と意見交換 ▲今回の事業で重要視すべき整備項目	・水路は多様性があるということをもっと話し合いたい ・安全，安心して水路を利用できればよい ・事業費負担を少なくし，下流に水を流すことを忘れないようにしたい *出席者が少なく，批判的な意見が出たのは残念だった④ *年代別に意見の相違が出た場合，お互いに話し合う時間がない⑤ *WSの趣旨をスタッフ，参加者ともに十分に理解する必要がある⑥
第3回 (2003.2.4)	○基本理念，設計図(素案)説明 ○質疑応答，意見交換 ▲管理道，洗い場，広場の名称と整備内容	・案のように整備できたらとてもいいと思いました⑦ ・子どもが安全に遊べる用水にしていきたい ・農業用水として水量を確保したいが，流速は落として欲しい

Ⅳ．ＷＳの効果と課題

１．住民参加の重要性

調査段階からの住民の関与により，文書資料だけでは分からない詳細な用水の景観特性について把握することができた。調査内容をもとにスライドショーや歴史探検マップを作成することにより情報の共有化を図ることができた(Table1 ①，②)。また，ＷＳや提案した広場の名称についても地域の方言を活かす等，地域資源を改修計画に反映することに繋がった。

２．運営

グループ活動によって，同世代間で活発な意見交換ができた(Table1 ③)ものの，世代間では話し合う時間が少なく，他のグループに対して批判的な意見がでた(Table1 ④，⑤)。ＷＳの運営にあたっては，日時や時間配分に留意するとともに，参加者，運営主体が共にＷＳの趣旨について十分に理解する必要がある(Table1 ⑥)。

３．若林用水路検討会の役割

検討会メンバーであるとともにＷＳの参加者でもある区長・水路管理協議会役員の積極的な参加により，ＷＳで得られた成果を水路構造等，具体的で詳細な部分にまで地元意向を反映することができた。そのため第３回ＷＳでは批判的な意見が出ず，素案に対して参加者は肯定的であった(Table1 ⑦)。

４．事業とＷＳの関連性

計画策定に期限があったため，ＷＳは３回を一区切りとしたが，Fig.2 に示したように，施工までの間に住民意向に沿った軽微な変更は可能とされ，行政側から柔軟に対応する姿勢が示された。事業の流れや前提条件，ＷＳの成果を参加者に明示することにより各ＷＳでの達成目的を明確にすることができた。また，ＷＳの成果を検討会にて具体化し，計画に反映していくという作業を繰り返して計画策定された。このプロセスそのものが計画策定手法といえる。

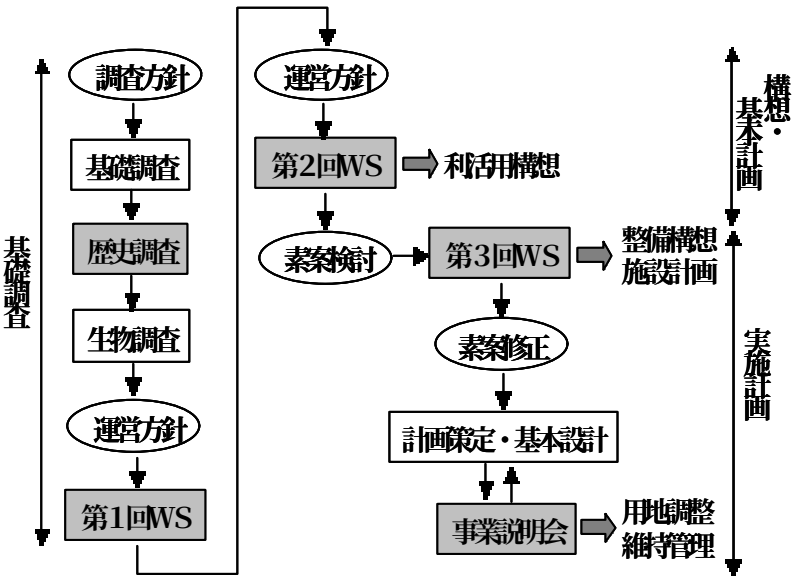

Fig.2 Planning process □:行政活動 ■:住民参加 ○:若林用水路検討会

【参考文献】1)(社)農村環境整備センター編(2001):『農村環境整備の科学』，朝倉書店